QAN便り

① 総会集合写真（福岡）

② 総会集合写真（東京）

QAN会長、2年目を務めさせていただきます、9期生の仲前浩之と申します。

昨年は「マジる」というキャッチフレーズの下、東京支部の活性化とQBSの現役生との交流の強化を行いました。去る5月16日に開催した第10回定期総会（写真①）は4年振りに東京を中心とする関東の皆さんにもSkypeを使って参加いただき（写真②）、QANに対する期待を直接感じることができました。

今年は、「つなぐ」をキーワードに掲げました。出会った会員同士のつながりが各会員の成長に貢献することがQANの果たす一番の役割です。今年は次の二つを核にQBSネットワークの進化を図りたいと考えています。

一つ目は、留学生の皆さんとのつながりです。中国を中心に各期に複数の外国から来られたQBS修了生がいます。昨年は4期修了生でマレーシア出身のシャズリンダさんを中心とする有志のご尽力で、福岡でのワークショップ開催とクアラルンプールへの視察ツアー（写真③）が行われました。ワークショップで広がった知見を、現地での体感がより深い理解を与えてくれたと伺っております。このような自発的な活動への支援を続けるとともに、中国・韓国出身の理事を配置して外国人修了生との交流の活性化を図っていきたいと考えております。

二つ目は、九州の中での様々なつながりです。九州大学の使命は九州に（そして日本、世界に）貢献する人材の育成であり、QBSには、九州の経済発展に寄与することが求められているものだと考えております。九州の経済規模は欧州の中堅国に匹敵する規模があります。QBSのある福岡は、毎年世界で住みやすい都市の上位にランキングされ、世界の注目も高まっています。また私事ですが、九州で生まれ・育ち・働き・家庭を築いており、九州の役に立たんといかん！という思いは人一倍です。今年のQBSは産学連携に一層の力を入れると伺っております。九州の産業界で多数活躍するQANのメンバーが貢献できることは多分にあるはずです。

皆様の益々の応援並びに行動を、よろしくお願い申し上げます。

仲前 浩之（9期生）

③ マレーシアツアー写真

QANは『QBS Alumni Network』の略称で、QBSの同窓会です。
現在の会員数は1-11期までの414名です。

QBS生が受賞

QBS生が日本広告学会クリエーティブ・フォーラム2015ポスターセッションMEP（学生部門）を受賞しました！

5月16日（土）九州産業大学で行われた「日本広告学会クリエーティブ・フォーラム2015」のポスターセッションにてQBSからの発表者（12期生・中井大助さん）がMEP（学生部門）（Most Expectative Presentation“最も期待の持てる発表”）を受賞しました。

発表タイトルは「リアルタイム飲食店空席情報の提供」で、発表内容は昨年1年間QBS有志で立ち上げ、QRECから支援を受けたプロジェクト「カメラを用いた空席情報提供システム」に関連した内容です。今回は、日本広告学会の関連フォーラムと言うことで、一般ユーザーへの広告を考える上で、飲食店の備品、特にコースターを使った広告について考察した内容となりました。

13期生44人が入学

4月11日（土）にQBS13回目となる入学式が、九州大学国際ホールにて行われました。当日は爽やかな晴天のもと、入学式に続くガイダンスを含め、3時間超の長丁場となるセレモニーを経て、新入生44名が緊張の面持ちで新たなスタートを切りました。

在校生紹介

中井 大助さん（12期生）
所属▸三省製薬株式会社

理系大学、大学院と進み、入社後も開発職とずっと理系畑を歩んできた中で、もっと視野を広げたいとの思いからQBSに入学しました。

QBS入学後は、慣れない財務や組織論と言った講義に苦労しましたが、おかげで様々な視点で物事を考えることが出来、実際の業務でも活かせていいます。

また、昨年は総合大学のメリットを生かし、起業家教育を行うQRECから支援金を頂きながら1年かけてビジネスプランの検討を行いました。この経験はQBSに入学してから最も役に立った経験で、QBSの講義で学んだことを比較的早い段階で、実際に業務で使う場面まで落とし込むところまで深めることが出来ました。具体的には、新たな事業プランの収益性検討や、新製品の販売戦略立案等が挙げられます。

QBSは総合大学だからこそ経営以外の教育機会も充実しており、2年目はそう言った機会が増える年でもあります。今年1年はそういった機会も使って、これからの業務に活かしていきたいと思います。

元村 明日香さん（12期生）
所属▸久野印刷株式会社

「学ぶのに時間や年齢は関係ない」

私は高校を卒業後に就職をし、社会人を経験した後に社会人学生として大学生生活を過ごしました。大学を卒業する際に、まだ先に何かあるのではないか、新たな自分が見つかるのではないかという思いでQBSへの入学を志願しました。QBSへ入学して学んだ事は、理論に基づいた知識や、すぐに実践できるフレームワーク等、仕事はもちろん、日々の何気ない会話の中でも役に立つものばかりでした。

また、日々の授業とは別にQRECのプロジェクトに参加し、メンバーと試行錯誤しながら一つのプロジェクトに打ち込み、授業で学んだ事をより実践的に応用する事で、学びの幅を広げ、より深く掘り下げる機会を得る事が出来ました。

QBSで得たものは知識だけではありません。他業種の方が集うQBSでは、自分が在籍する業界だけでは考えつかなかった考え方を得る事ができます。沢山の仲間を得る事で、自分の知識や考え方に深みを増しました。

残りの一年間、悔いのないように頑張りたいと思います。

編集発行／九州大学ビジネス・スクール
担　　当／QBS支援室
住　　所／〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1
電　　話／092-642-4278
メールアドレス／bs@econ.kyushu-u.ac.jp

●九州大学ビジネス・スクールに関するお問い合わせ
〒812－8581 福岡市東区箱崎6－19－1
九州大学貝塚地区事務部教務課学生第四係
TEL.092-642-4167
ホームページ http://qbs.kyushu-u.ac.jp/
facebook.com/QBS.MBA

QBS 九州大学ビジネス・スクール Kyushu University Business School

Kyushu University Business School
QBS News Letter
九州大学ビジネス・スクール ニューズレター
ISSN 1882-871X
VOL.22
2015.5

編集発行▸九州大学ビジネス・スクール　担当▸QBS支援室　住所▸〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1　電話▸092-642-4278
メールアドレス▸bs@econ.kyushu-u.ac.jp　facebook.com/QBS.MBA

専攻長交代のご挨拶

新専攻長　高田 仁

近年、ビジネスや社会を取り巻く環境の変化は激しさを増しており、解決すべき課題も複雑化し、経営マネジメントを担う個人や組織体に大きな変化を強いています。これら複雑化・高度化する課題に対して、未完成の手段やツールを作り込みながら解決を図るためには、盤石な基礎力のうえで、従来とは異なる視座や行動様式をもって挑戦しなければなりません。

QBSは、現状に安住せず、高い意識を持って門を叩いた方々が集まる場です。この学び舎で教授陣や学友と過ごす2年間のMBA課程は、固定化されていたマインドセットに変化をもたらすとともに、経営マネジメントにまつわる様々な講義や演習、さらには活発な自主課外活動を通じて分析力や洞察力が磨かれ、その結果、課題解決の道筋を見出す力が高まります。

QBSは、基本となる経営リテラシーに加え、設立以来アジア・ビジネスやMOT（技術経営）を重視した教育体系を構築してきました。同時に、総合大学である九州大学を母体とするメリットを最大限に活用し、アントレプレナーシップ教育を担うQREC（ロバート・ファン／アントレプレナーシップ・センター）、イノベーション政策を担う人材を育成するCSTIPS（科学技術イノベーション政策教育研究センター）、さらには、医療経営やロースクール、実践臨床心理と共同で設立した専門職大学院コンソーシアムなど、学内横断的な教育資源を有します。また、ビジネスプラン・コンテストやICABE（アジアビジネス国際コンソーシアム）をはじめとする様々な課外活動など、獲得した知識を統合的に実践へと結びつける機会を豊富に提供しています。

難問に怯まず変革に挑戦し新たな価値を生む人材の輩出を目指し、活発に活動して参る所存ですので、関係者の皆様にはご理解とご協力を頂けますと幸甚です。

前専攻長　平松 拓

QBS専攻長を務めたこの2年間は、環境面では積極的経済政策の採用により、金融・外為・株式市場を起点に日本経済の活力回復が伺われた時期であると共に、設立10周年の区切りを経たQBSが新たな進化を目指す時期でありました。新体制としては先ず大学基準協会による2度目の経営系専門職学位課程認証評価の受審、ディプロマ・ポリシー他諸規定の整備、更に財務体質改善などの直面する課題に取り組み、26年度に始まる5年間の適合認定と当専攻のプログラムの透明度向上、更には既に強みとして定着しているエグゼクティブ向けプログラムやビジネスプラン・コンテストなどQBSの教育関連諸活動を今後一層発展させるためのQBSの体質強化を目指しました。同時に取り組んだのが、QBSの固有目的の一つ「アジア・ビジネス」教育の拡充で、アジアに張ったQBSの教育交流活動の根を一段強化すべく、提携校との関係強化、母国に帰国した交換留学修了生のネットワーキング、地域関連研究や教材蓄積など多岐に亘る活動を展開しましたが、提携校からの交換留学生派遣希望の増加にもそうした活動の効果が顕われているものと考えております。

こうした活動は教員は固より、学生、OB、そして大学関係者との連携があって始めて可能となったもので、QBSという組織の総合力を再認識致しましたが、同時に専攻長としてのこの2年は、より広く学外からQBSの活動を支えて下さっている方々のご理解、ご協力、そしてご助言等に豊富に触れることのできる機会でもありました。こうした多くの方々のご協力、ご支援にここで改めて感謝申し上げ、退任のご挨拶とさせて頂きます。

QBS講演会「世界を舞台に事業価値の創造：Dennoo 創業者 長山大介氏の挑戦」

新学期が始まったばかりの4月19日（日）の午前中に、31歳の若さながらテクノベンチャーのDennooやC1Xを創業され、アントレプレナーとしても投資家としても世界を舞台に活躍されている長山大介氏をお招きして、事業価値創造の講演会を209教室で開催いたしました。QBSが新しいプログラムとして企画している事業価値創造に携わる人材育成に向けて、まさに最適な方においでいただくことになったと思います。

高田専攻長からのQBSの新しいプログラムの説明に続いて、長山氏から「Born Global Startup」と題して講演を頂きました。ご自身は幼少のころから米国で長く生活しておられましたが、日本の『失われた20年』への問題意識から、大学進学を機に日本に戻られ、勉学の傍ら身近な起業機会を見出して翻訳クラウドソーシング会社を創業したのが、アントレプレナーとしてのスタートでした。現在、中心的に経営するC1Xは、web広告業界における慣習に機会損失が潜んでいることを見抜き、顧客の痛みを事業価値に転換する大胆なビジネスモデルを提案されています。とても刺激的かつ示唆に富んだ内容でした。

参加者との30分程度のQ&Aの後は、会場を変えて軽い昼食を食べながらの交流会がありました。長山さんの前からは列が途切れず、またQBSの学生、修了生やQRECの受講者の交流がありました。最近参加したセミナーや講演会の中でもっとも素晴らしかったとの声が、何人もの参加者から聞かれました。このようなセミナーをシリーズ化することを企画していきたいと考えています。

星野 裕志（国際経営、国際ロジスティクス）
高田 仁（産学連携マネジメント、ビジネスにおける競争優位性特論）

『QBSアントレプレナー育成プログラム』の開始

昨今、我が国の産官学に共通する課題として「新たな事業創造」が指摘されています。経営者はこのことを最重要の経営課題に位置づけているものの、担い手である人材の不足が決定的なボトルネックとなっています。一方で、QBSが立地する福岡市では、国の「創業特区」指定を受け、アントレプレナーを発掘し支援する活動が活発に展開され始めています。九州大学においても、QBSも参画してQREC（ロバート・ファン／アントレプレナーシップ・センター）が設立され、教育機会の充実が図られてきました。

このような状況や社会的需要を鑑み、QBSでは、様々な社会課題を機会として捉え、新たな事業創造を担う人材育成を強化するために、この春から『QBSアントレプレナー育成プログラム』をスタートさせました。当面は、下記の特徴を持つ試行的プログラムとして実施します。

【プログラムの特徴】

- 起業関連科目の重点的履修や関連する行事への参加を通じた、事業創造に関する知識や実践機会の獲得
- 事業創造に必要な人脈の形成と、地域・国内外のエコシステムへの接続
- 上記を適切かつ効果的に行うための、メンター教員による就学指導

【プログラム参加学生の具体的な活動】

＜1年次＞

- 関連情報の共有と推奨科目の履修
- QBSやQREC、さらには学外の関連行事への参加（ビジネスプラン・コンテスト等）

＜2年次＞

- 特定のゼミ（高田ゼミ、五十嵐ゼミ）におけるチーム制プロジェクトの実施
- 上記プロジェクトの成果を活かしたプロジェクト論文の執筆

本プログラムの実行を機に、事業創造を育むエコシステムの形成を図る所存ですので、関係の皆様のご理解とご協力をよろしくお願いします。

高田 仁（産学連携マネジメント、ビジネスにおける競争優位性特論）

第5回 QBS短期エグゼクティブプログラム

2014年の11月から、2015年の3月まで第5回となるQBS短期エグゼクティブプログラムが行われた。九州在住の40-50歳代の企業幹部を対象に、大半は博多駅で日曜日を使って企業研修を行うものだ。2014年度もQBSのコア科目を中心に、京都大学の木谷教授（戦略）、慶応大学の飯盛教授（ケース）、トランストラクチャーの代表取締役森氏（組織人事）等の支援を得たプログラムとなった。今年の参加者は16名で、例年のようにトヨタ九州、住友商事、新日本監査法人、正興電機からの参加者を得ており、この2・3年ではNEC、BCC、佐賀県、戸上電機からもご参加いただいている。また、2014年度はエーエヌディーや三好不動産などがMBA学生経由で参加していただいている。今年度の視察旅行は華中の杭州と上海に出かけた。**烏鎮**経由で杭州に行き、浙江大学のGreeven先生の講義を受け、企業訪問は、杭州東芝、上海森松工業を訪れ、ジェトロのレクチャーを受講した。当プログラムには例年個人プロジェクトがあり、QBS客員教授の大津留先生、平松教授と村藤による3度の指導会を経て、最終日にプレゼンテーションを行った。当プログラムも5回で84名の受講者を得ており、QBSの幹部研修も九州に定着しつつある。

村藤 功（企業財務、企業価値創造とM&A）

第23回 ICABE学生交流プロジェクト

2015年春のICABEは3月13日から4日間の行程で、平松教授、岩下講師引率のもと、タイ・バンコクに行きました。

タイではチュラロンコン大学ビジネススクール（CBS）を訪ね、同大学の学生とグループワークを行いました。「日本人とタイ人のイメージを抽出し、双方のギャップを把握した上で相互理解を図るための方策を提案する」という目標に向けて、「介護サービス事業」と「伝統工芸産業」の2テーマについてディスカッション。私は福岡の伝統工芸品である「博多織」の商品を見せながら、タイでの販売展開の可能性について議論しました。「帯としてではなく、部屋の装飾材料や高級装飾品として売る方が共感を得られるのではないか」といった意見を聞け、とても有意義で貴重な経験となりました。

企業訪問は、いずれも現地企業で精米卸会社「U-THAI PRODUCES」とコンドーム製造メーカー「THAI NIPPON RUBBER INDUSTRY」を訪れました。「U-THAI PRODUCES」ではタイ米をブランド毎に選別した後、中国やシンガポールなどアジア各国向けに包装される工程を見学。工場では多くの作業員が働いていて、安い人件費の強みを肌で感じることができました。「THAI NIPPON RUBBER INDUSTRY」では、製品毎に形状、サイズ、色、匂いなどがマーケティング調査等に基づいて細かく分類され、世界中のニーズに対応できる生産体制が築かれていました。企業訪問は2社ともCBS側にアレンジして頂き、改めてタイのホスピタリティ溢れる国民性を実感することができました。

大淵 和憲（12期生）

QBS BOOKレビュー

この1冊

『成長の限界』（1972）　『成長の限界／人類の選択』（2004）

ドネラ・H・メドウズ、デニス・L・メドウズ 他（ダイアモンド社）

1970年に熊本から上京して東京工業大学に進学し、下宿の近くの多摩川の白い泡と匂いに閉口し、汚れた空気のためか夕暮れの太陽が紫にかすむ姿を眺め、真夏のプールで光化学スモッグで目が痛くなる公害というものを初めて実感したのは18歳のときであった。故郷の熊本では水俣病が新聞の紙面を賑わせていたが、阿蘇山に降った雨の湧水を水道水に利用していた熊本市では公害という言葉とはほぼ無縁であった。1976年に大学院を卒業して企業の研究所に勤務し、モノづくりの最前線での研究開発に没頭し始めた頃に、上司から「成長の限界」を読むことを勧められた。MITの制御工学他の専門家集団が、経済の成長と資源の消費、さらに環境の破壊が進む中で地球は人類の生存をどれだけ許容できるかというローマクラブからの問題提起に対するシミュレーション結果をまとめた書籍であるが、その予測結果は決して人類のバラ色の将来を示していない。経済活動の進展に伴う、人口増加、エネルギーや鉱物資源の消費、環境汚染の進展と食糧生産の限界が人類の繁栄を左右することを数値で示した結果は衝撃的であった。地球環境と人類全体の経済活動のマネジメントが不可欠であるということを示唆した書物であり、1970年代にはその予測結果を疑問視する人もいたが、40年後の地球の人口がほぼ予測通りに推移した結果等をみると一読に値する書籍である。本書は経済の緩やかな持続的成長と地球の包容力を維持する技術の開発が不可欠であることを示唆しており、過剰投資、過剰生産／過剰在庫、資源の浪費と環境汚染に苦しむ隣国の人にも読んでほしいと願っている。

太田 和秀（研究開発マネジメント）

修了生紹介

田村 圭志さん（1期生）

所属▸福岡地所株式会社

QBS入学時は外資系企業で経営管理システムの提案やコンサルティングに携わっておりました。業務に就く中で得られる知識は自分にとっては膨大なヴォリュームでしたが、あらためて、経営管理に関し体系立てて理解を深めておきたい、との思いから、QBSへ入学しました。

講義では、様々な企業のケースを使った討論があり、討論を繰り返していくことで、知識を自分の言葉として吸収することができました。また、講義の中では、課題解決の視点を経営者のレベルで考えることが求められ、そこで考え抜くことを繰り返したことが、現在の業務の上でも、大局的な視点を持って考える、という意識に繋げられていると感じています。

修了から10年以上が経過した現在も、QBS修了生間での情報交換等を行うことで視野を拡げていくことができています。先生方との交流も続き、福岡への国際人流の増加について具体的な施策を検討していくプロジェクトの立上げにもつながりました。QBSを通して、異業種の方々と知り合えたことは、QBSで得た知識と同じ位、価値のあるものでした。

波多江 正剛さん（4期生）

所属▸株式会社 島本食品

私がQBSを志望したのは、32歳の時でした。大手企業に就職した後、実家にもどり数年仕事をすることで、一通り、実家の仕事もわかったところで、「自分の人生、本当にこのままでいいのだろうか？」と疑問に思うことがありました。また、今まで実務の中で経験したビジネスというものを、一度理論で整理するとどうなるのだろう？そんな気持ちで受験し、運がいいことに合格しました。

さて、QBSに入学しての体験は、学科としての財務戦略、組織論、リーダーシップから起業論まで幅広い学問体験から、プロジェクト演習では学会発表、マレーシアへのスタディツアー、中国へICABEなどなど、ここには書ききれないほどの体験であふれています。実務経験もあり、学ぼうという意欲の高い仲間と切磋琢磨すると、可能性は無限大、これはビジネスでもそうだといえます。私達の人生は私達で作っている、それを教えてくれた二年間でした。皆さんも是非とも自分自身にチャレンジし、自分の可能性を試してください。人生に必要な二年間だったと、思える体験が待っています。